

令和7年度 学校評価・学校関係者評価書

| | |
|-----|-----------|
| 学校名 | 稲美町立加古小学校 |
|-----|-----------|

1 学校運営の目標・方針

自ら学ぶ意欲と豊かな心を持ち、たくましく生きる子の育成
～未来社会の創り手として幸せに生きていける力をつける～

2 本年度の重点目標

○安心できる学校 ○お互いを尊重し、信頼し合える学校 ○自ら学ぶ意欲を育てる学校○地域とともにある学校

3 学校自己評価結果 A:十分達成している(そう思う) B:おおむね達成している。(ややそう思う)

C:どちらかという達成されていない。(あまりそう思わない) D:ほとんど達成されていない。(そうは思わない)

4 総合的な学校関係者評価

いじめや不登校といった対応の難しい課題にも真摯に向き合い、現状や取組内容を丁寧に見守っている点が評価できる。学校だけで抱え込むのではなく、PTAや地域と連携しながら「ワンチーム」で子どもを育てていこうとする姿勢が着実に根付いている。
・体験活動やゲストティーチャーを招いた学習、地域・ボランティアとの交流など、多様な学びの機会が確保されている。こうした取組により、子どもたちの主体的や対話的な学びが自然と高まり、学習意欲の向上にもつながっていると感じられる。
・家庭では得がたい集団での学習やスポーツ、情操教育を通して、互いに助け合うことの大切さを実感している。運動会や学習発表会などの行事でも子どもたちが主体的に関わり、協力して創り上げる姿に大きな成長と感動が見られる。
・少人数の強みとチーム担任制を活かし、一人の児童を複数の教員が見守る体制が整っている。多面的に子どもを理解し支援できる環境は安心感につながり、よりきめ細かな指導の充実にも結び付いている。
・学校運営の目標・方針に基づき、教職員が自ら考え実行する風土が年々確立されている。学校自己評価の高さは、子ども一人一人に真摯に向き合っている証であり、のびのびとした学校生活にも表れている。

5 評価項目ごとの学校関係者評価

| 分野 | 評価項目・取組内容(指標) | 達成状況 | 学校の取組状況・改善の方策 | 学校自己評価の結果及び改善方針についての評価 |
|------------------------------------|--|--|--|--|
| 学校運営 | ・学校教育目標や学校経営方針を教育活動に反映し、日々の教育活動を学校だより・学級だより・ホームページ等で分かりやすく伝えている。 | A | ・保護者連絡ツール、学校ホームページ、紙媒体等を活用し、状況に応じた適切な情報発信に努めた。学年からの連絡は必要に応じて保護者連絡ツールを用いて随時発信し、児童の日々の学校生活の様子や体験活動、周知すべき事項については学校だよりで情報提供を行った。また、学校だよりを地域回覧することで、学校教育活動への関心を高め、学校の取組への理解を深めることができた。その結果、学校行事や研修、各種ボランティア活動への地域の方の参加が増え、活動内容の充実につながった。学校の目指すところや定期的な情報発信は学校だよりに集約し、その他の連絡や報告等については適宜、適切な手段を用いて発信している。今後も、効率的かつ効果的な情報発信に努めていきたい。 | ・学校だより等を通して、子育ては保護者や学校だけでなく、地域住民も関わることで状況への理解がより深まると感じる。 ・学校生活や行事、活動内容が学校だよりや連絡帳アプリで丁寧に伝えられ、保護者や地域からも好評で関心が高まっている。 ・自治会回覧板で学校だよりやコミスク通信の共有やホームページ等を通して日常の様子がよく分かり、地域の方の行事やボランティア参加増加にもつながっている。 |
| | ・学校行事の時期や内容は適切である。 | A | ・感染症対策や熱中症対策を講じた上で、運動会や学習発表会、オープンスクール等の行事を実施し、多くの保護者や地域の方々を招くことができた。行事の運営方法や内容については、保護者や地域の方々から概ね適切であったとの評価を得ている。また、コミュニティ・スクール座談会における児童や地域の方々の意見を踏まえ、運動会や学習発表会に地域参加プログラムを取り入れるなど内容の充実を図った。その結果、多くの参加者による交流の機会が生まれ、児童・保護者・地域のいずれからも高い評価を得ることができた。運動会終了後の環境整備についても、多くの保護者や地域の方々の協力を得て、短時間で効率的に除草作業等を行うことができた。行事の実施時期は2学期に偏る傾向があるものの、行事を特別なものとして捉えるのではなく、年間の学習計画に基づき、児童の発達段階に応じた学びの成果を発表する機会として位置付けている。今後も今年度の実施時期を基本としつつ、準備や内容を精選しながら実施していきたい。さらに、自然学校や修学旅行に限らず、運動会や学習発表会においても「自分たちでつくる」という意識が児童に浸透しており、児童が主体的に計画・運営に関わる姿が見られた。 | ・学校行事の時期や内容は概ね適切で、運動会や学習発表会では児童一人ひとりが責任をもって生き生きと発表し、その成長を実感できる。 ・行事が集中する2学期は多忙だが、学年としての自覚やまとまりを示す大切な時期でもあり、感動的な演技や演奏から日頃の指導の成果が感じられる。 ・子どもの意見を取り入れた工夫ある運営により主体的な活動が充実し、地域の方々も楽しめる内容で地域とのつながりが深まっている。 ・感染症や熱中症への配慮から2学期中心となるのは理解できるが、安全対策のうえで夏季や冬季の行事も検討できれば、よりバランスのよい年間計画になると考える。 |
| | ・清掃が行き届いており、美化に努め、校舎内外の物が整理整頓されている。また、定期的に施設・設備の点検をしている。 | A | ・学年が上がるにつれて清掃の手際は向上してきているが、より質の高い清掃を目指し、割り当てられた清掃時間いっぱいを使って丁寧に取り組むよう指導した。その結果、これまで気づけなかった場所や、普段手をつけていなかった箇所を清掃する姿や、他学年の清掃を手伝う姿が見られるようになった。また、自主的に窓ふきや汚れの気になる箇所の清掃、スリッパの整頓などに取り組む児童もおり、清掃や美化に対する意識の高まりがうかがえる。校舎には老朽化が進んでいる部分も多いが、物を大切にすることを育てるとともに、今後も美化や整理整頓に努めていきたい。 | ・清掃や整理整頓が行き届いた環境は心を落ち着かせ、学校生活をより良くするが、その維持には全員の意識向上と継続した取組が欠かせない。 ・子どもたちには学校を自分たちできれいにする思いが育ち、学年とともに清掃や美化への意識も高まっている。 ・かつて印象の良くなかったトイレも、今では気持ちよく利用できる環境が整っている。 |
| | ・いじめ・不登校問題等への対応は適切で、教職員が一致協力できる生徒指導体制ができている。 | B | ・チーム担任制を実施して4年目となる。複数の教員が多角的に児童の様子を見守ることで、言動や態度の小さな変化にも気づくことができ、気になる点については毎日の職員夕会で速やかに情報共有している。また、毎週木曜日のチーム担任者会では、内在化しつつある高学年児童の状況について、教員それぞれの立場から情報を出し合い、丁寧に深い児童理解に基づいた適切な対応について協議している。その結果、いじめや不登校問題を含む生徒指導上の課題に対して、チームとして時間を置かずに対応することができ、迅速に納得解を導き、改善・解決へとつなげている。即時の改善が難しい課題や不登校児童への対応・支援については担当者を確認し、保護者との信頼関係を大切にしながら継続的に対応している。また、児童がしんどさを抱え込む前に声かけを行うことができることでスクールカウンセラーに気軽に相談する児童が増加しており、教員とスクールカウンセラーが連携した取組も進展している。さらに、町のふれあい教室等の関係機関と連携し、児童の気持ちや保護者の意向を尊重しながら、学校との関わりを継続できる機会の模索を行っている。チーム担任制は児童や保護者に浸透しており、「悩みや内容に応じて相談相手を選んでも話ができるようになった」という肯定的な意見が増えている。一方で、「相談すること自体のハードルが高い」と感じている声もあり、今後は児童・保護者ともにより相談しやすい体制づくりについて、引き続き工夫していく必要がある。 | ・チーム担任制により、複数の教員が児童を多角的に観察できる体制が整いつつある。日常の小さな変化を見逃さず早期対応できる点が評価され、今後も全教職員で支える姿勢の充実が期待される。 ・いじめや不登校等への不安に対し、担任間の情報共有やスクールカウンセラーとの連携を通じて相談体制づくりが進められている。一方で、制度の理解が十分に浸透していないことが課題であり、丁寧に周知が必要である。 ・SNS問題については、継続的な指導が求められる。チーム担任制を活かし、複数の視点による日常観察と早期対応を行うことが重要である。 |
| | ・危機管理マニュアルを作成し適切に運用している。登下校の安全について、点検・指導がされている。 | A | ・危機管理マニュアルを整備し、非常時における教職員の動きや役割について日常的に確認・共有している。不審者侵入防止のため、児童登校後は通用門を施錠し、来校者は防犯カメラで確認する体制が定着してきている。避難訓練では、時間や場所を工夫するとともに、ICTを活用した事前学習を取り入れることで、より現実的な訓練を実施することができた。1月の防災集会では、稲美町危機管理課の協力を得て、児童・保護者・地域と連携した地域ぐるみの取組を行った。登下校時には、地域ボランティアや民生委員・児童委員による見守り活動に支えられ、児童の安全確保につながっている。近年多様化する災害に対応するため、今後は教職員研修を通して危機管理に関する知識と意識の向上を図るとともに、「自分の身は自分で守る」という児童の防犯・防災意識の育成を継続していく。 | ・避難訓練や不審者対策が着実に実行され、児童が安心して学校生活を送れる体制が整っている。今後も日頃の訓練を通じた防犯・防災意識の育成を継続してほしい。 ・学年に応じた指導により「自分の身は自分で守る」という意識が高まり、家庭でも話題になるなど、主体的に行動する姿勢が育っている。 ・登下校時は地域の見守りが支えとなっている。集団登校が難しい地区もあり、地域や行政と連携した安全対策の充実を望む。 |
| ・授業方法を工夫・改善し、分かりやすい授業に心がけている。 | A | ・全学年で教科担任制を導入し、専門性を活かした系統的な教材研究を通して、わかりやすい授業づくりを進めることができた。「対話を通し学びを深め、表現する授業づくりの工夫」を研究主題に掲げ、全教科で対話を取り入れた授業改善に取り組んだ結果、児童が自分の考えを伝え合いながら学びを深める姿が見られるようになった。また、どの教科においても一人一台端末の活用が定着し、タブレット端末が学習ツールとして有効に機能することで、学習効果の向上につながっている。今年度は、総合的な学習のまとめを他学年や地域に向けて発表したり、道徳科においてタブレット端末や大型提示装置を活用し、多面的・多角的に考える学習を進めたりすることで、学びの活性化と充実を図ることができた。さらに、個人やグループで課題を設定して取り組む学習が定着し、児童が意欲的に学習に取り組むとともに、自己調整力の育成にもつながっている。 | ・教科担任制のもとで専門性を活かした授業が行われ、子どもたちの学習意欲や学ぶ姿勢の向上が感じられる。自分の可能性に気づき伸ばそうとする気持ちも育っているため、今後も継続してほしい。 ・対話やグループ活動、他学年や地域への発表を通して、考えを伝え合いながら主体的に学ぶ力やコミュニケーション能力が育まれている。 ・タブレット端末を活用しつつ教科書やプリントも併用した授業が分かりやすい。ICTを活かしながらも漢字の反復練習など書く学習を大切に、一層の基礎学力の定着にも努めてほしい。 | |
| ・評価(授業評価・学びの姿等)を通して、適切な指導をしている。 | A | ・評価においては、各教科の振り返りを重視し、毎時間の学びを基に次の課題を設定させるとともに、児童の学習への取組や姿勢を丁寧に見取り、評価へとつなげてきた。 | ・「自ら学ぶ力」を育てるため、児童が目標を持ち主体的に学ぶ力を伸ばしたい。家庭でも学習時間や計画を立て、習慣化を図ってほしい。 ・自主的に学ぶ児童が増える一方、取り組みにくい児童には家庭と連携し継続的に支援や学力差・習慣差に応じた丁寧な対応も望まれる。 | |
| ・子どもに家庭学習(宿題等)や学習準備等の習慣を身につけさせている。 | A | ・低学年・中学年・高学年それぞれに応じた家庭学習の在り方を明確にし、段階的に「自ら学ぶ力」を育成する取組を進めてきた。その結果、保護者からは「テスト前に子どもが自主的に学習するようになった」といった声も聞かれ、家庭学習において自己調整力を発揮する児童が増えつつある。一方で、課題の提示がないと家庭学習に取り組みにくい児童も見られるため、学年や学習内容に応じて教師が課題を示すなど、柔軟に対応していく必要がある。今後も、自分に必要な課題を見付けたり、予習を取り入れたりする家庭学習への意識を高め、「自ら学ぶ」力の定着を図っていく。 | ・座学と実習を組み合わせた体験型カリキュラムは理解を深め、学びを自分のもののできる有効な方法である。今後も実践的な学習の充実を望む。 ・幅広い体験学習や交流活動を通して、子どもたちは興味を持ち、新たな発見を重ねながら教養を育てている。外部の力を活用した体験活動を、今後も継続してほしい。 ・年々新しい活動が取り入れられ、地域とのつながりも深まっている。多様な体験の機会が子どもたちの成長につながっていると感じる。 | |
| ・体験的な学習や問題解決的な学習を積極的に取り入れている。 | A | ・教師の支援のもと、児童が自ら計画して取り組む活動を積極的に取り入れてきた。学校行事に加え、各学年の体験活動やゲストティーチャーを迎えた学習・交流活動においても、児童が主体的に企画・運営する姿が見られた。高学年だけでなく中学年においても、自分たちで考え、計画し、運営する力が着実に育ってきている。また、外部講師の学びをきっかけに、難民の子どもたちを支援するための古着回収を校内に呼びかけたり、リサイクル活動として使用済みノートの回収に取り組んだりするなど、学びを行動に結び付ける実践も見られた。さらに、地域の協力を得たサツマイモ栽培体験や田植え・稲刈り体験、まちづくり団体と連携した防災学習や巡回水族館、公共機関・企業の派遣事業、町の路線バスを活用した校外学習など、多様な教育支援事業を活用することで、幅広い体験活動を提供することができた。これらの取組は、児童の学びを深めるとともに、保護者からの評価も高い。 | | |

| 分野 | 評価項目・取組内容(指標) | 達成状況 | 学校の取組状況・改善の方策 | 学校自己評価の結果及び改善方策についての評価 |
|--|---|--|--|---|
| 課題教育 | ・道徳の授業を大切にし、内容の充実 に努めている。 | A | ・複数の教員が交代で道徳科の授業を行い、多様な視点から児童の心の動きを見取ることで、一人一人の内面の成長をきめ細かく支援してきた。さらに、今年度から2年間、稲美北中学校区で「道徳教育実践研究事業」を受け、「考える楽しさを創る道徳の授業」を目標に、本校の研究テーマと関連付けた対話を取り入れた授業改善に取り組んでいる。目標を意識し、小中連携も視野に入れて両校と連携した実践研究を進めており、お互いの研究授業に参加して研鑽を積むことができている。講師を招聘して夏に研修会を行い、その学びを活かして年3回の全校研究授業を行った。材分析シートを用いて参観・協議したことで、授業を見る視点が明確になり、事後研修での学びが深まった。これらの取組を通して授業改善が進み、「道徳の授業が楽しい」と感じる児童が増加している。 | ・「おはよう」「ただいま」などのあいさつがよくでき、日常の基本が身につけていることはすばらしい。道徳を通して、人の気持ちを考え思いやりをもつ力がさらに育つことを期待する。 ・道徳は生涯を通じて学び続けるべき課題である。人の気持ちに寄り添い、思いやりの心をもって行動できるよう、ご指導いただきたい。 ・複数教員による指導や小中連携など、多様な視点から心の成長を支える工夫がされている。時代の変化に応じた楽しく学べる実践を今後も大切にしてほしい。 |
| | ・読書活動を充実させている。 | A | ・児童が利用しやすい場所に図書室を配置し、昼休みには図書委員の閉館放送をきっかけに多くの児童が来室し、列をなす姿が見られる。毎日貸し借りができる環境により、読書の好循環が生まれている。また、図書担当者が児童の興味・関心の変化を捉えながら蔵書を補充することで、児童の「読みたい」という意欲に応え、読書活動の充実と読書好きの児童の育成につながっている。さらに、町立図書館司書やボランティアの支援により、図書室の環境整備や補修が進み、利用しやすい環境が整っている。家庭読書週間も定着し、保護者アンケートでは、親子で読書する時間の充実や読み聞かせの楽しさ、読書の大切さについて多くの肯定的な声が寄せられた。今後も活字に触れる重要性を意識し、読書活動のさらなる充実を図り、豊かな読書経験を積ませていきたい。 | ・読書活動の充実や図書環境の整備が進み、保護者評価も高い。新しい本の導入などにより利用しやすい環境が整い、子どもたちの興味・関心も高まっている。 ・読書が習慣づいてきており、時間があるときに進んで本を読む姿も見られる。活字離れが進む中でも、豊かな読書経験を通して感性を磨いてほしい。 ・スマホ等の普及で読書機会が減る中、本に親しみやすい取組は意義深い。 |
| | ・生命の大切さ、共に生きる豊かな心の育成に努め、地域の人々との関わりを通して、実践的な力を培っている。 | A | ・各教科や行事を含む全ての教育活動において、命の大切さや人と人とのつながり、多様性を認め合うことの重要性を繰り返し指導してきた。その結果、児童は命を大切に、友だちの個性を認めながら共に学び、成長しようとする意識を高めている。本校では、登下校の見守りや環境整備、体験活動、学習支援などにおいて、多くの地域の方々から継続的な支援を受けており、児童も地域の方との交流を楽しみにしている。こうした取組を通して、加古地域への誇りや、地域の方々への感謝の気持ちが育っている。また、社会科や総合的な学習の時間では、地域の方をゲストティーチャーとして招き、PTAや学校運営協議会と連携しながら地域の教育力を生かした学習を進めることで、学校だけでは培いにくい実践的な力の育成につなげることができた。 | ・「命の大切さ」や「生きること」を基盤に地域の方々との交流や体験学習、コミュニティスクールの取組を通して、子どもたちが多様な考えに触れ成長してほしい。 ・地域の皆様方をボランティアやゲストティーチャーとして迎える機会が増え、互いに学び支え合いながら成長を見守り応援する思いが子どもに伝わっている。 ・今後も学校運営協議会と連携し、地域の協力に感謝しつつ、学校外の人や団体ともつながる学校づくりを進めてほしい。 |
| | ・環境体験学習・自然学校等で体験活動を充実させている。 | A | ・幼・1・2・3・6年生のサツマイモ植え・収穫体験、3年生の稲作体験、1・2年生と特別支援学級の大根栽培など、地域ボランティアや営農組合、JA青壮年部の協力を得て、充実した農業体験活動を実施することができた。また、5年生の自然学校では、現地スタッフの指導のもと、教師の支援に頼ることなく児童が自主的に行動する姿が見られ、自立心の育成につながった。保護者アンケートにおいても、「地域の方に教わりながら多様な体験ができ、コミュニケーションも深まった」「学校や家庭以外での成功や失敗を経験できることがありがたい」といった肯定的な意見が多く寄せられた。今後も、各学年の発達段階に応じた体験活動の充実を図っていきたい。 | ・農業関係者が減少する中で、農業体験学習を楽しみにしている児童がいることがうれしい。加古地区は農家が多いものの、家庭で農業を手伝う機会は少なく、学校での体験は貴重で大きな経験となっている。 ・先生方の工夫により、地域の方と関わりながら地域の特性を生かした充実した活動が行われており、今後も継続してほしい。 |
| | ・計画的に避難訓練等を実施している。 | A | ・火事・不審者・地震を想定した避難訓練を実施した。不審者対応訓練では、さすまたを用いた対応や教室の施設・バリアード設置など、より実践的な内容とし、教職員の動きや役割分担を再確認することができた。また、地震訓練では、予告なしで休み時間に緊急放送を行い、児童が自ら判断して避難する訓練を行うことで、「自分の身は自分で守る」という意識の向上につながった。同日には、稲美町危機管理課の協力を得て防災集会を実施し、地域や保護者も参加して避難所開設ゲーム(HUG)に取り組んだ。児童・大人が一緒に活動することで、防災への理解と意識を一層高めることができた。 | ・想定外の事態が多い中、自然災害や不審者に備えた避難訓練・防災学習を計画的に実施し、予告なしの緊急放送も取り入れることで、主体的に判断・行動する力がついている。 ・防災集会に地域や保護者が参加することで、経験に基づく知識を共有でき、より実践的な学びが深まるため、今後さらに参加が広がることを期待したい。 |
| ・外国語を通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成している。 | A | ・中学年の外国語活動では英語に慣れ親しむことを、高学年の外国語科では「読むこと」「書くこと」を含めた学習に取り組んだ。目線や表情、ジェスチャーを取り入れ、目的意識や相手意識をもって英語でコミュニケーションする場を多く設定した。また、タブレット端末を活用し、写真やイラストを用いて自分の考えを英語で発表する活動を取り入れたことで、友だちと相談しながら意欲的に取り組む児童が多く見られた。ALTは週2日終日勤務し、登下校時のあいさつ、給食や清掃、休み時間の遊びを通して児童と積極的に関わっており、日常的に英語に触れる機会が増えている。マレーシアの学生との交流では、学んだ英語やタブレット端末を活用して自分の思いを伝え、積極的に交流を楽しむ姿が見られ、国際理解の深化につながった。授業参観やオープンスクールで公開授業を行い、児童の学びの様子を保護者や地域に発信することもできた。一方で、英語に苦手意識をもつ児童もいるため、今後も授業改善を進め、国際感覚の育成につなげていきたい。 | ・ALTとの日常的な交流や海外(マレーシアの学生)との交流機会があり、休み時間やあいさつでも自然に関わる環境は、子どもたちが外国を身近に感じる良い取組である。 ・学年に応じた内容やタブレット端末の活用で授業が分かりやすく楽しくなり、英語を楽しみにする児童も増えている。家庭でその日の1語1文を披露するなど、学びを広げる工夫も期待したい。 ・一方で苦手意識をもつ児童や保護者の声もあるため、誰もがより楽しく自信をもって学べる取組の充実が求められる。 | |
| 努力目標 | ・気持ちの良い挨拶や返事ができるよう指導している。 | A | ・登下校時、低学年児童は明るく大きな声で挨拶ができており、地域の方からも「気持ちがよい」との評価を得ている。高学年児童においては、相手の顔を見て挨拶をしたり、横断時に待ってもらったドライバーに帽子を取って礼をしたりするなど、より質の高い挨拶ができる児童が増えてきた。地域の方から挨拶の上手な児童を推薦していただき表彰する取組は、児童の意欲向上につながっている。一方で、教職員や来校者など関わりが少ない相手に自分から挨拶ができる児童は限られているため、今後も日常的な声かけを継続していく必要がある。また、授業中だけでなく、教育活動全般において、はっきりとした返事や発表時の声の大きさ、聞く姿勢についても継続して指導していく。 | ・児童が地域の人へも積極的に声をかけ合い、実施されている取組は大変すばらしい。 ・元気に大きな声であいさつする子もいれば、はにかみながら返してくれる子もいる。見守りの中でその成長を感じられることがうれしい。 ・低学年はよくあいさつをする一方、高学年は恥ずかしさから声が小さくなる傾向もある。誰にでも自らあいさつできる児童が増えることを願っている。 |
| | ・敬語や正しく適切な言葉遣いができるよう指導している。 | B | ・各学年の国語科における言葉の学習を通して、場に応じた言葉遣いを意識しようとする児童の姿が見られるようになってきた。授業中や公共の場では、正しく丁寧な言葉遣いを意識して行動できる児童が増えている。一方で、休み時間や登下校、放課後や家庭など日常的な場面では、乱暴な言葉遣いが見られる児童もいる。また、動画配信サイト等で使われる言葉や表現の影響により、友だち関係に影響を及ぼすケースも見られる。今後は、社会生活における基本的なマナー・礼儀としての敬語や丁寧な言葉遣いが定着するよう、授業に加えて学校生活全般を通して、粘り強く指導を継続していく。 | ・学年が上がるにつれ丁寧な言葉遣いや礼儀・マナーの向上が見られ、今後も友達同士での優しい言葉がけが増えることを期待する。正しい言葉遣いは社会生活に不可欠であり、自分の発言や配信に責任をもつ意識を育てるため、家庭と連携して取り組んでほしい。 ・SNSやチャットの普及で敬語を使う機会が減る中、学校で丁寧に指導していただけるのはありがたい。 |
| | ・安心感があり、お互いの良さや違いを認め合える仲間づくりを目指している。 | A | ・児童が安心して自分の良さや可能性を発揮できる「居場所」と「出番」を保障し、温かい学級づくりにも努めてきた。教師が一人一人の強みを見取り、それを活かす場を教科や特別活動、行事の中に意図的に設定し、肯定的に評価してきたことで、児童の中にも友だちの良さや個性を認め、大切にしようとする姿勢が育ってきている。また、ここ数年継続して全学年で性的マイノリティに関する学習に取り組む、6年生はそのまとめとして、全校生や地域の方々自分たちの思いを発信することができた。1年生から多様な性について学ぶことで、「いろいろな人がいることが当たり前」という意識が自然に育ち、家庭で学びを話題にすることで、家族と多様性について考える機会にもつながっている。今後も、互いの違いを認め合い、それぞれの良さが発揮できる仲間づくりを進めていく。 | ・一人一人の特性や良さを生かせる場づくりを継続し、小規模校の強みを生かした学級・学校づくりを今後も工夫・推進してほしい。 ・互いの違いを認め合い、誰もが安心できる居場所のある環境が整っている。 ・多様性や性的マイノリティについて学ぶ取組は、知識だけでなく人としての力を育み、悩みを抱える子どもを支える力となっており、教師が子ども一人一人の輝ける場を生み出している。 |
| | ・運動を楽しみ、健康に配慮できる児童を育成している。 | A | ・業間休みには運動場で遊ぶことを原則とし、校内放送での呼びかけにより、児童が積極的に外遊びに取り組んでいる。運動が苦手な児童も、友だちと話をしたり散歩をしたりするなど、自分に合った方法で体を動かし、健康な体づくりにつなげている。教師も児童と一緒に遊ぶことで、外遊びへの参加が広がり、児童理解や信頼関係の構築にもつながっている。また、体調に応じた衣服の調整やマスクの着脱を自分で判断できる児童が増えてきている。委員会活動では、異学年でチームを編成し、ドッジボール大会や大縄跳び大会を企画・運営するなど、楽しく体を動かす機会を増やす取組を行った。 | ・現代社会やコロナ禍の影響で運動機会が減り体力低下も懸念される中、学校で外遊びや体を動かす時間を積極的に設け、異学年交流も含め継続している取組は大変意義があり、体力・運動能力向上やリフレッシュにつながるものとして歓迎している。 ・交通事情などで外遊びが難しい中、業間に運動場で遊ぶことを原則とし、先生方も一緒に体を動かしてくださることで、子どもたちが楽しみながら安心して活動できている。 |

| 自己評価における特記事項 | 項目以外の点での来年度の課題や具体的改善方法 |
|---|--|
| <p>・保護者や地域の方へ学校教育活動の情報を継続的に発信し、「地域とともにある学校」づくりを推進した。教育資源に恵まれた地域の強みを生かし、体験活動や学習支援を充実させることができた。延べ約300名の地域ボランティアが学習支援や環境整備に携わり、学習効果の向上と落ち着いた教育環境づくりにつながっている。「楽しい」「やりがいがある」「また声をかけてほしい」との声もいただき、地域ぐるみで児童を育てていただいていることを実感した一年であった。</p> <p>・「自分たちでつくる〇〇」を掲げ、行事や授業、学年活動で児童主体の取組が定着してきた。地域からも高い評価を受け、上級生の姿に刺激を受けて下級生も挑戦するなど、学校全体へ広がりを見せている。今後も継続し、さらなる充実を図りたい。</p> <p>・学校運営協議会の活動が充実し、児童との座談会でも意見が行事や各種取組に反映できた。地域プログラム(PTA共催)、加古フェスへの出店、「トライやるスクール」、ありがとうの会、学校肝だめし等を実施し、児童の参画意識を高めるとともに地域との結びつきを深めることができた。</p> <p>・チーム担任制は4年目を迎え、児童・保護者・地域にも浸透してきた。教職員間で成果と課題(清掃や当番活動、不登校対応、学習習慣、相談体制、共通理解等)を整理し、率直に協議した。今後も定期的に振り返りを行い、迅速な改善とさらなる充実につなげていきたい。</p> | <p>・1、2年生の放課後学習に加え、3年生以上や授業中に困り感のある児童への支援も十分検討してほしい。ボランティアの協力が得られるなら対象学年の拡大も考えられる。</p> <p>・保護者アンケートは概ね好意的であった。今後も子どもの小さな変化に丁寧に対応し、より相談しやすい体制づくりを進めてほしい。</p> <p>・行事への地域参加が分かりにくい点、周知方法の工夫をお願いしたい。</p> <p>・PTAの在り方が問われる中、児童にとって平等で充実した活動のため、行政や地域との一層の連携が必要と感じる。</p> |